

「価値創造の場」としてのオンライン授業の可能性

－社会人メンターのオンライン参加による効果－

和崎 宏*

* 関西学院大学総合政策学部

Possibility of the online class as a place of value creation

－ Effect of the online participation by the member of society mentor －

Hiroshi Wasaki *

* School of Policy Studies, Kwansei Gakuin University, 2-1 Gakuen, Sanda-shi, Hyogo, 669-1337, Japan

Abstract: It's just a sign of the times that many universities in Japan are starting on line classes. Kansei Gakuin University has also started all its lectures to be on line only from the start of the semester in April 2020.

In the class of “Theory of Cyber Society” at Kansei Gakuin University, social media has been used as a LMS(Learning Management System). Since the class started to use the web conference system such as Zoom, it allowed many social mentors to participate in such class and support student engagement, which produced great effects compared to the face-to face classes that we used to have.

In this article, I would like to propose how online classes can be effective as a new education model for universities instead of suggesting online classes are better than offline classes.

1. はじめに

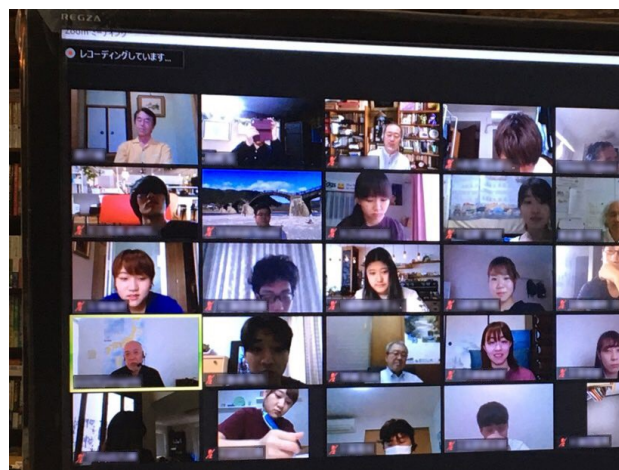
関西学院大学では、新型コロナウイルス感染症の流行のため、2020年4月7日から20日までの間、すべての学部の全授業科目および大学院の講義科目が休講となりました。その後、4月21日から原則オンライン授業の試行が指示され、5月7日以降は全学で完全にオンラインに移行しました。

コロナ禍での突然の決定でしたが、総合政策学部の「サイバー社会論」では、これを機会にして、対面授業では実施できないオンラインのメリットを活かした授業の実践に取り組むことにしました。

サイバー社会論では、従来から授業支援システムとして地域SNSを利用していましたが、その活用を高度化し(第2章)、多くの社会人にオンライン環境で協力してもらい(第3章)、対面授業で行っていた内容をweb会議システムを利用してオンラインライブ授業として展開(第4章)、不足する学生とのコミュニケーションを補う仕組みを組み込んで(第6章)、完全オンラインであっても学習効果をより向上させる授業を実施し、また、学生と社会人が本気で取り組むことにより両者の相互作用を生み出し、学習のクオリティを向上させ(第7章)、他の授業では得られない大学生の学びを達成することができました(第8章)。

本論では、サイバー社会論がオンライン授業に至る経緯とその取り組み内容を整理すると共に、社会人の支援を受けた授業とオンラインの長所を活かした授業外の学生へのサポートにより、オンライン授業によって生まれる欠点を補い、価値創造の場を提供することで、学生の学習効果を高める授業をいかに実現したかについて述べます。

昨今の激しい社会変化やグローバル化の進捗の中で、問題意識や解決能力の高い人材の育成が大学教育に求められています。しかし、従前の知識移転を主とする教育では対応に限界があります。対象者の認識の範囲内で実行するニーズ対応型ではなく、対象者の潜在意識を具現化するような提案型人材の育成する「価値創造教育ⁱ」の実践は、現状では困難を伴っています。



(写真 1) サイバー社会論のオンライン授業

今回のサイバー社会論の授業が、コロナ後の大学での授業が、対面かオンラインかという選択ではなく、外部社会人材と連携し、オンラインとオフラインを融合させた、「価値創造型授業」のスタイルの確立を目指すひとつのモデルとして活用してもらえることを期待しています。

2. 対面授業の代替ではなくオンラインだからできるサイバー社会論へ

サイバー社会論は、関西学院大学総合政策学部で2011年に開講した授業(半期2単位)。

急速に進展するサイバー社会において、学生が仮想空間と現実空間の関係性を考察することを通して、グローバルⁱⁱな視点から新たな社会を生き抜く視座を得ることを目的としています。

コロナ禍までの授業の構成は、能動的思考(positive thinking)、批判的思考(critical thinking)、論理的思考(logical thinking)を、グループ学習によるアクティブラーニング(active learning)ⁱⁱⁱで磨いていく手法です。

1. 地域 SNS のコミュニティに提供された、研究論文とオンデマンド教材^{iv}による事前学習を行う
2. 教員が論文に基づいた論点解説を対面授業で行う
3. 教員が提示したテーマに関して、学生がグループに分かれてディスカッションを行う
4. グループでの討議の結果を発表し、考察を共有する
5. 討議の内容をグループ報告として、地域 SNS のコミュニティに提出する
6. 学生は授業の振り返りをリフレクションとして、地域 SNS のコミュニティに提出する

このようなプロセスを繰り返し、最後の3回でサイバー社会に関する「研究発表(予行演習)」「発表準備」「最終発表」を行うという流れになっています。

円滑かつ効果的に授業の運営を支えていたのは、地域 SNS 「ひよこむ」に設置され、メンバー以外にはインターネット上から参照できないように設定された「内部公開コミュニティ」の仕組みでした。

ひよこむを利用したメリットは、

- ・学内関係者に利用が限定されている大学の LUNA(学内 LMS^{vi})ではなく、安心安全な環境を確保しながらも外部人材と交流できる地域 SNS を学習支援システムとして利用
- ・ひよこむの通じて多くの社会人メンバーが、オンラインで学習のフォローアップを行う
- ・公開授業や研究発表などの機会に、社会人メンバーが実際の授業に参加して学生の指導にあたる
- ・対面で行うすべての授業に関与してくれる教育関係者がメンバーにいる

などがありました。

完全オンラインでの実施には、対面授業の「論点解説」「グループディスカッション」「グループ発表」のプロセスを、オンラインツールで行う必要がありました。そこで、双方向ライブとオンライングループワークに対応できる WEB 会議システム「Zoom」に着目し、試行してみたところ、問題なく利用できることがわかりました。しかし、対面授業をオンラインに入れ替えるだけでは、大幅に不足する教員と学生、及び学生間のコミュニケーションを補完することはできません。

オンライン授業で可能となるメリットを最大限に活かし、

オンラインで発生するコミュニケーションロスを埋めるだけでなく、よりクオリティの高い授業モデルを実現して学生の学習成果を最大化することを、完全オンライン授業の目標としました。

3. オンラインだから可能になった全国各地からの社会人の参加

政府が4月7日に、東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県を対象として、新型コロナウイルス感染拡大に関する「緊急事態宣言」を発令しました。これにより、不要不急の外出の自粛や企業などの経済活動が減速し、テレワークの利用などで自宅で過ごす時間が増えて、いわゆる「巣ごもり」傾向が顕著になってきました。

会いたい人にも会えず、やりたいこともできず「コロナ疲れ」が出てきた人が少なくない中、教員が4月25日にフェイスブックとひよこむを使い、オンラインでオリエンテーションを実施した前日の手応えを報告し、オンライン授業への参加を呼びかけました。すると、「オンラインなら参加できる」と多くの人々からリアクションがありました。コロナ禍による生活環境の変化がなければ、このような反応もなかったことでしょう。

継続的に授業に参加してくれた社会人に、参加の動機や協力の理由を聞き取ってみた(要約)ところ、

- ・コロナ禍の大学の授業興味があり参加し、関係者の熱意を感じ継続した(早瀬さん)
- ・学生さんたちと一緒に学ばせてもらい、自然と熱くなった(戸所さん)
- ・情報について勉強すべく聴講から入ったが、学ぶことも多く楽しみのようになった(桂さん)
- ・授業に参加し若者たちと一緒に学ぶことで、地域活動にも非常に役立った(西谷さん)
- ・外出自粛で余裕ができ参加したが、学生たちの反応が良く飲み込まれた感じ(坪田哲さん)
- ・自分が人生の先輩から受けた恩を若い人たちにお返ししようと考えている(松岡さん)
- ・オンライン授業の試行と社会人の関わりなどに興味があったから(畑井さん)

このように社会人の方々には、現在の大学の授業に興味があつて最初はちょっと参観してみる程度の人も少なくありませんでした。しかし、Zoom のブレイクアウトセッションを使ったオンライングループディスカッションを通して、学生たちとともに議論に加わることで、5月21日に兵庫県での緊急事態宣言が解除になってからも、継続して授業に参加してくれた方が何名もいらっしゃいました。

社会人のモチベーションを上げた要因のひとつに、サポートするチームの固定化がありました。

チームは5~8人の学生で構成されており、5回目までの授業では社会人は同じチームの助言を担当することにしており、この段階で学生たちとある程度潤沢なコミュニケーションが

成立していました。その後、9 回目までは毎回異なるチームを担当することとし、学生には多彩な目線でアドバイスを受ける経験を提供しました。

その上で、10 回目の研究発表から、学生のグループが指導してくれる社会人をオファーする形式をとりました。

学生にとっては、自分たちが依頼した先生であることから、自ずから助言を受けた調査や考察にも力が入ります。また社会人側は、専門性に応じたアドバイスができることから自然と意欲が向上しました。

「最終発表」前には、社会人が学生のヒアリングに付き合ってくれたり、学生が何度も主催する WEB ミーティング(後述)に、社会人が加わって仕上げるに関わるなど、ひとつのチームとして活動しているかのごとく良好なコミュニケーションを共有していました。

4. 手探りからスタートしたオンライン授業への取り組み

対面授業だった「論点解説」「グループディスカッション」「グループ発表」を代替する Zoom ミーティングは、後に大学がアカウントを提供してくれることになりましたが、すでに教員が所持していたので、スタート時は個人アカウントを使用し、対面授業のコミュニケーションを確保しようと考えました。

全授業を「定期ミーティング」に設定して、「待機室」を使い、「ホスト前の参加」「入室時ミュート」をオンに、「ブレイクアウトルーム」を事前に設置しておきました(ブレイクアウトセッションのメンバー事前登録は、取りこぼしが多く使用できませんでした)。

学生や社会人には、参加 URL (Invite Link) を事前に送付して授業開始 20 分前に開始するようにしました。

ホスト(教員)の作業を分散させるために、ふたりの社会人に「共有ホスト」をお願いしました。

ここに 60 名近くの学生と 10 名以上の社会人を収容し、それぞれのカメラをオンにして実施する WEB ミーティングが始まりました。ひと昔前ならとても実現できない環境を、Zoom はいとも簡単にこなしてくれました。

デフォルトの設定が甘く脆弱性につかれて、部外者に侵入を許して会議が荒らされるなど、問題とされているセキュリティに関する懸念に留意さえすれば、双方向ライブ授業への利用に不都合はありませんでした^{vii}。

教員が授業で利用する WEB 会議システムに Zoom を選んだ理由は、

- ・接続が安定している
- ・通信データ量が非常に軽い
- ・100 人までなら同時接続で WEB 会議が可能(大学から供与された環境は最大 300 人)
- ・グループワークに使えるブレイクアウトルーム
- ・開始も録画もワンクリック
- ・画面共有で資料が提示できる
- ・ホストが参加者を簡単にコントロールできる

などの特長が、サイバー社会論で求めるすべての機能を包含していたからです。

まずは社会人のみでミーティングに参加してもらい、軽い打ち合わせをしてから待機室に入っている学生が入室。このときに事前に割り振られているグループ名(A から H までの 8 チーム)を名前の前に付加することを指示しておきます。これで、学生をブレイクアウトルームに送る際に、アルファベット順に表示されるため一覧からの割り当てが非常に簡単になりました。

論点解説では WEB ブラウザとパワーポイントやワードを切り替えながら画面共有して進め、グループディスカッションでは学生と社会人を所定のブレイクアウトセッションに送り(各セッションでも画面共有などの機能が利用可能)、教員は各セッションを回りながら時間が来たら全員をミーティングに呼び戻してグループ発表を行います。

オンラインでありながら、対面で行っているのとはほぼ遜色のないくらい、スムーズに展開することができました。

5. オンライン授業でのコミュニケーションロスを補完する工夫

オンライン授業でもっとも気をつけなくてはならないことが、現実顔に顔を合わせることがない関係から生じるコミュニケーションロスだと思います。机を並べて冗長的な会話もできるキャンパス内での環境と違い、オンラインは非常に緊張感の高い授業となりました。反面、授業時間の中では画面で学生の表情が読み取りにくく、コミュニケーションの不足を補うことはできないので、毎回授業後に課しているひよこむ上での「リフレクション」を利用することにしました。

5.1 すべてのリフレクションにコメントを加える

サイバー社会論では、授業中に質問や発言をすると加点される仕組みにしています。しかしオンラインでは「手を上げる」や「チャット」の機能はあっても、普段と比較にならないほどコミュニケーションのハードルは高くなります。

そこで、ひよこむのコミュニティに投稿されたすべてのリフレクションに、教員が指導的なコメントを入れて、これに適切にレスポンスした学生に加点することとしました。

その結果、半数以上の学生がコメントに返信を行うようになり、また何度も突っ込んで質問をする学生も増えてきました。最初のうちは、短文で簡潔な文章が少なくなかったリフレクションですが、最終回近くなるときちんとした考察と的確な文章力でまとめられたものが多くなり、リフレクションのやりとりでも教員のコメントを鵜呑みにするのではなく自分なりに深めて発言できるようになるなど、学生が確実に育ったことを確認することができました。

毎週 50 名以上の学生のリフレクションにコメントするのは、時間もパワーも必要でしたが、教員と学生の間の信頼関係を徐々に醸成していくには大切な作業でした。

5.2 社会人メンターと学生の「共育」

授業が終了して学生がオフラインになったあと、メンター^{viii}として指導してくれている社会人(以下、社会人メンター)がそのまま Zoom 会議室に残り、毎回 30 分程度の振り返りを行いました。それぞれが担当したグループでの議論や授業全体の進行、課題の意義やあり方についてまで、それぞれの経験や知見を基に意見交換を行いました。

学生が会議室に参加する前に(学生は「待合室」を使って待機し、一斉にまとめて入室)、社会人メンターたちで行う当日打ち合わせと併せて、これらの時間が、初めて参加する人でも全体の流れを予め把握できて、自信をもって学生に向き合えて、全体の円滑かつ効果的な進行に大いに役立っていました。

このように、メンターを担ってくれた社会人が、事前打ち合わせと事後のリフレクションを行い、「学び」について対話し組み立てていくプロセスを、時間をかけて大切にできたことが特筆されます。社会的な経験を積んだ人ほど、学生のコミュニケーション力不足が目につき、どうしても「指導」に傾斜しやすくなります。サイバー社会論でも、最初のうちにはこの傾向がみられました。

しかし、メンター役の社会人が、機が熟すのを待つことを納得し、我慢して行動したことで、学生との歯車が上手く回りだしました。学生にとっても、社会人メンターにとっても、自分たちが一緒に学んでいるという体感が、相互の共感につながっていったのです。

オンラインで社会人同士が正確に情報共有できたからこそ、ともに育ちあう「共育^{ix}」が可能となったといえます。(詳細は 7 章)

5.3 車座トーク

授業とはまったく別に、いくつかの取り組みを実践しました。

ひとつめは、学生が興味を持っているカテゴリーの有識者と、少人数で意見交換する「車座トーク」です。

初回は、5 月 30 日、兵庫県で活躍する社会起業家の玉田恵美さんに「まちづくりと地域活性化」について、1 時間たっぷり Zoom ミーティングで意見交換を行いました^x。

大人たちが考える以上に、学生たちが真剣にまちづくりについて問題意識を持ち、地域活性化に取り組もうという意欲があることに驚かされました。また、机上の資料ではなく叩き上げの現場の実話に触れることで、学生たちには大きな刺激を受けていました。

2 回目は、海外に留学する学生が非常に多い本学の学生対象に、ご主人の海外赴任の関係で、家族で数多くの国で生活を経験され、現在は国際交流ボランティアとして活動している桂美穂子さんに「国際理解と異文化交流」をテーマとして 6 月 11 日に実施しました^{xi}。

学生たちは、桂さんの経験に裏打ちされた話はもちろん、履修生同士で双方向で話し合い、互いにより勉強になったとのことでした。

5.4 Zoom 自学室

また、Zoom システムの中に、グループ発表の準備のために学生が自由に利用できる会議室をふたつ用意しました。

当初、学生たちには教員や社会人に準備から参加してもらうという意識はなく、学生同士で LINE 等でグループを組み、調査や考察を共有する発表準備を進めていました。6 月 22 日に「会議室の貸し出し」をひよこむのコミュニティで提案したところ、学生たちには意味が理解できなかったのか、芳しい反応はありませんでした。

そこで、学生たちに社会人に準備段階で加わってもらう意義について説明を行い、6 月 26 日に教員個人と大学供与のふたつのアカウントを使ってミーティングを開設しました。すると、教員の意図に気づいてくれたようで、スケジュールを組んで会議室を利用するチームが出てきました。社会人メンターの方々も、時間を工面して献身的に学生たちのサポートを行ってくれました。

社会人メンターだけでなく、対象とする研究に関する企業経営者や農業従事者などの協力が得られることを知った学生たちは、とくにラスト 1 週間においては、ふたつの会議室に空き時間がないくらいの頻度で利用され、「最終グループ発表」の成果につながっていました。

5.5 ほどよく閉じた安心安全空間を提供^{xii}する「ひよこむ」の存在

サイバー社会論では、2010 年の開講当初から、LMS として地域 SNS「ひよこむ」を活用してきました。

「ひよこむエンジン」と呼ばれる OpenSNP^{xiii}システムは、2006 年に教員の会社(インフォミーム株式会社)で開発され、全国 40 以上の自治体・大学・団体で SNS として利用されてきました。各地のホストはそれぞれ独立しながらも、人的ネットワークによりゆるやかに連携しており、「日経地域情報化大賞 2008^{xiv}」でグランプリを受賞しています。

さすがに昨今は、facebook や Twitter などのグローバルな SNS にアクティビティが流出し、以前と比べると大幅にアクセスが減少していますが、ひよこむは地域活動への帰巣本能を蘇らせる存在として地域のメンターの要素を持つ人たちに利用されています。

ひよこむの特長は、完全招待制・推薦人後見制・詳細なアクセスコントロールなどを活かした「安心安全でほどよく閉じたインターネット空間を実現」し、信頼と互酬性のネットワークである「地域の社会関係資本(Social Capital)を顕在化」させたところです。ひよこむが触媒となって育った人的つながりは、地域活性のイニシアチブとして活動しています。

サイバー社会論を支えてくれた社会人メンターの多くは、このような良質なネットワークから輩出された人たちであり、人間的にも社会的にも高い意識を有する人材そのものでした。

5.6 その他の取り組み

その他にも、学生がひよこむに書き込んだブログに、SNSのメンバーがコメントすることによる交流や、プレゼンテーションの「いろは」を指導する「研究発表相談会」、松岡時康さんが人間としてのあり方や社会人としてのモラルを説く「お節介焼の独り言♪」シリーズ、元日経デスクの坪田知己さんが、70年の人生で得た知識と経験を元に、いろんな話題を提供し質問に答えてくれる「坪田自燃塾」など、それぞれサイバー社会論ならではのプログラムが用意され、授業外の交流と学びを深めることができました。

6. オンラインになってより高まる学習効果

サイバー社会論のオンライン授業は、初回のオリエンテーションとラスト3回の「研究発表」「最終発表準備」「最終グループ発表」を除き、徐々に情報化に関する理解を深めるべく、連関するテーマについて下記の内容で進めました。

- (1) 教員による解説 による論点整理と概観把握
- (2) グループ討議によるオンライン協調学習
- (3) グループ発表による質疑応答・教員等による総括

これらの授業内容は、(グループ討議を除き)すべて録画して、即日ひよこむ上の授業コミュニティで公開したので、オンデマンドで振り返ることができます。(ただし、授業のコミュニティはひよこむメンバーのみの限定公開となっているので、外部インターネットからは参照できません)

昨年までの対面授業では、毎夜のバイト疲れのせいか船を漕ぐ学生が数人はみられていましたが、WEB カメラをオンにしたZoomのオンライン授業では、居眠りをしたり中座をしたりする学生は、最後までほとんど見かけられないほど、集中してオンライン授業に取り組んでいました。そこで、数名に聞き取りしてみましたが、「授業の後はどっと疲れが出る」と答えるように、オンラインの負担は小さくなかった^{xv}ものと思われる。

普段の授業に配点される60点は、毎回授業後5日間の間に提出する個人の「リフレクション(振り返り)」とグループ討議で行った議論の内容と結果を記載した「グループ報告」がともに最大2点ずつ。これに発言や質問など積極的な学習行動に加点する(最大2点)で構成されます。

2016年から5年間は、この授業配点に最終グループ発表での「プレゼンテーション」評価(10点)とその概要をまとめた「ドラフト^{xvi}」評価(10点)を加え、個人の「最終レポート」評価(20点)とあわせて100点満点で採点する方法を取っています。

対面授業だった2016年から2019年までの4年間と、ほぼ同じ評価方法を採用してオンライン授業を実施した2020年については、5年間のクラス平均を比較することにより、ある程度は学習効果を確認することができます(表2)。

毎回の授業点の累計については、直近4年間の対面授業に対するオンライン授業における学習効果の優位性はあまりみられません。ただ、学生から提出されるリフレクションのクオリティは、オンライン授業の2020年の方が全体的に高かつ

たように感じられました。

(表1) 直近5年間のサイバー社会論成績のクラス平均値

年度	授業点 (60)	人数	プレゼン (10)	ドラフト (10)	レポート (20)	得点平均 (100)
2020	47.20	54	7.98	8.63	15.96	79.19
2019	48.66	65	7.89	6.98	14.00	77.54
2018	47.76	63	7.89	7.87	15.19	78.71
2017	47.80	88	9.05	8.11	15.56	80.98
2016	45.88	52	7.48	8.13	13.63	74.87

(表2) 直近5年間のサイバー社会論の成績分布

	S(-90) 人/%		A(-80) 人/%		B(-70) 人/%		C(-60) 人/%		合計
2020	8	15.1	24	45.3	8	15.1	13	24.5	53
2019	6	9.4	19	29.7	26	40.6	13	20.3	64
2018	4	6.3	29	46.0	18	28.6	12	19.0	63
2017	13	14.9	40	46.0	30	34.5	4	4.6	87
2016	2	3.9	16	31.4	18	35.3	15	29.4	51

最終グループ発表については、プレゼンテーションではさほどの違いは見なかったものの、論文執筆につながるドラフトでは、他の年度より評価が高かったことがわかります。これは個人の最終レポートでも同じ傾向を見ることが出来ました。

一概には言えませんが、リフレクション提出に伴う教員や社会人メンターとのやりとり、ブログを介したひよこむメンバーとの交流、研究発表や最終発表の準備の中で、考察力・文章力などが徐々に成長したのではないかと考えられます。

さらに各年度の成績分布(表3)を見ると、成績最上位者であるS評価(90点以上)の比率が、過去4年間で飛び抜けて好成绩を示した2017年度^{xvii}に匹敵する15%前後となっていて、熱心に履修して理解を深めた学生の割合が多かったことがわかります。ただ、2020年度は2017年度と比較して、C評価が多くなっているのは、オンライン授業において全ての学生が積極的に取り組んだわけではないことを示しています。

結果として、対面授業とオンライン授業では、成績を見る限り顕著な効果の違いは見いだせないまでも、全体的に学習効果は向上しているという手応えがありました。

7. 社会人メンターによるオンライン指導の効果

サイバー社会論の授業を通して、情報化に関する系譜と知見を深め、能動的思考(positive thinking)、批判的思考(critical thinking)、論理的思考(logical thinking)を磨いてきた学生たちが、その学びの成果を研鑽・披露する機会として、ラスト3回の授業を使い「研究発表(6月26日)」「最終発表準備(7月3日)」「最終発表(7月10日)」を実施しまし

た。

研究発表では、各グループそれぞれ自由に近未来の情報化に係る題材について調査・考察を行い、プレゼンテーション 5 分＋質疑応答 2 分の計 7 分間の発表にまとめます。この段階ではどのグループも(担当する社会人メンターが、学生からの連絡を待っていたにも関わらず)他者のサポートを受けるという考えがなく、それぞれに LINE グループや Zoom 会議室を用いて情報共有を行っていました。

一度もまみえることなく、短い期間のオンラインだけでまとめた発表としては、着想や発想についてある程度評価できるものの、文献や事例の調査やリサーチ、考察、結論としての提言は、ほとんどのグループが調べ学習の延長でしかありませんでした。

そして、他のグループの発表を聴いた学生たちが特に気づいたことは、

- ・自分たちの発表と他のグループを比較して、様式・内容・態度・印象など多様な点で学び改善することが多い
- ・質疑応答後のコメントを通して、社会人メンターから早い段階でサポートを受けることの大切さ

でした。

こうして学生たちが「本気」になって最終発表に取り組む中に、社会人メンターが加わって適切なアドバイスを行い、有用な意見交換やディスカッションを積むことにより、社会人メンターにも徐々に学生たちの本気が伝わりました。そして、ひよこむの授業コミュニティや用意された Zoom 自学室などを活用して議論を深め、最終発表のクオリティを飛躍的に向上させました。

最終発表は、研究発表より時間を延長し、発表 7 分＋質疑応答 3 分＋チーム担当の社会人メンターのコメント 2 分の合計 12 分で、8 つのグループを入れ替えながら実施しました。この中で、D グループの「コロナと大学教育－新たな ICT 教育に向けて」と、H グループの「ICT 教育を学校に通えない子どもたちに」は、大学に入学して憧れのキャンパスでのびのび学ぼうとしていた新入生たちが、自らまったく想定もしていないオンライン授業を自宅で受けざるを得なかった環境を振り返りながら、今後の大学教育についての考察を加えたものでした。

「コロナと大学教育－新たな ICT 教育に向けて」で D グループは、オンライン授業と対面授業の長所と短所を整理した上で、自らの体験から「自由度が高い大学教育」を実現するためには、オンラインと対面を融合させた授業形態が望まれると、具体的なプランを含めて提案しました。

また「ICT 教育を学校に通えない子どもたちに」の H グループは、GIGA スクール構想^{xviii}で一気に高度化する教育インフラとコロナ禍におけるオンライン教育の拡大を前提に、著名なジャーナリストによるオンデマンド授業とサイバー社会論におけるオンライン授業を比較し、それぞれの課題を整理することにより、リアルとバーチャルを融合させた授業形態を提案しています。

このふたつの発表事例から見えることは、

- ・学生たちは大学生らしい学びを享受できる施設や環境が揃い、同級生や先輩後輩とともに成長することができるキャンパスで学びたい
- ・コロナ禍でスタートしたオンライン授業の体験を無駄にしたくない
- ・オンラインにも対面にも長所や課題があるので、それぞれに適合し、融合的にデザインされた授業形態が求められる
- ・学内 LMS に閉じた環境だけでなく、ひよこむのような安心安全な環境の下、信頼できる外部の人材(社会人メンター)によるサポートが、学びのクオリティを大幅に向上させる

コロナ禍によって生まれた広域の社会人メンターの支援によるオンライン授業の試行が、変化に乏しかった日本における大学教育に、リアル(フィジカル空間)とバーチャル(サイバー空間)を融合させた新しい流れを作り出そうとしているのかも知れません。

8. 「学修活動と授業に関する調査」にみる完全オンラインのサイバー社会論の評価

関西学院大学では、2005 年度から統一的な方式で全学的に学生による「学修活動と授業に関する調査」を実施しています。この調査の目的は、教員の能力を判定するものではなく、寄せられた評価や意見をもとに、授業担当者が次年度以降の授業内容や方法の改善に取り組むことや、授業環境について組織的な改善に結びつけることです。

学生の評価は、概ね彼らが授業にどのように取り組んできたかを表しているので、授業の改善には大変役に立つ情報ソースとなっています。

例年は対面の授業時間内に、マークシートに記入・回収していましたが、今年はオンライン授業であったため、期限(6 月 25 日～7 月 5 日)を区切って LUNA(学内 LMS)を使い無記名で提出を求めました。サイバー社会論では、履修生 53 名中 37 名(回収率約 7 割)が回答しています。

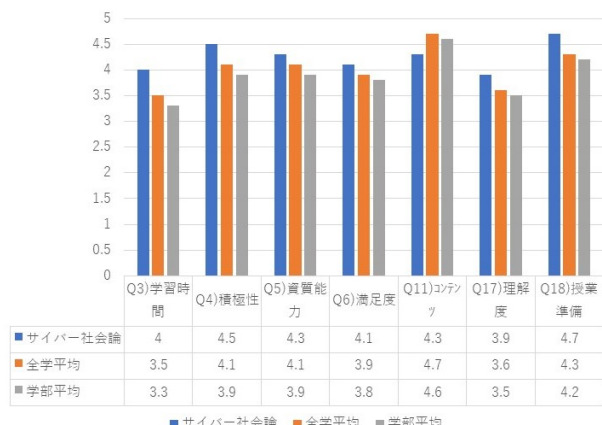
学生たちの回答は、大学高等教育推進センターによって集計され、当該授業だけでなく全学平均、学部等平均とともにフィードバックされるので、授業改善への具体的な方策を検討することができます。今回はこれを、オンライン授業として実施したサイバー社会論において、学生たちがどのように取り組んで来たかに関し客観的に評価する指標として、設問の項目別に考察してみました。

8. 1 授業内容に関する調査結果

毎回論文を読み、授業を受け、リフレクションを提出するサイバー社会論は、もともと「授業時間外学習」を必要とする講義です。アクティブラーニングをスムーズに実施するために、例年は 100 名前後の履修希望者に、手間のかかる授業であることを説明して本気で取り組めない学生に履修変更を促していました(今年はコロナ禍の影響で履修希望の留学生

が少なかったもので、例年より少なかったのではやソフトに対応)。

(図1)授業に関する評価結果



Q3. あなたは、この授業に関連した授業時間以外の学習(予復習・課題等)に対して、平均して1週間にどれくらい費やしましたか。

Q4. あなたは、この授業に積極的に取り組んだと思いますか。

Q5. あなたはこの授業を通して、卒業までに求められる資質・能力を向上できたと思いますか。

Q6. あなたは、全体としてこの授業に満足していますか。

Q11. この授業で提供されたやコンテンツ(講義資料、音声データ、動画など)にアクセスするために、どこまでする必要がありますでしたか。

Q17. この授業は、担当者が学生の理解度を確認しながらこの授業を進める工夫をしていた。3.9 3.6 3.5

Q18. この授業は、担当者が十分に準備をしてこの授業に臨んでいた。4.7 4.3 4.2

※各項目選択肢を、A:5点、B:4点、C:3点、D:2点、E:1点に換算して集計

(A) そう思う、(B) どちらかというと思う、(C) どちらともいえない、(D) どちらかというと思わない、(E) そう思わない、(X) 答えたくない、(Z) 不明・該当しない

授業はオンラインになりましたが、進行や課題などはほぼ例年通りの内容にしているもので、Q3にある「授業時間外学習」が全学や学部の平均と比較してかなり高いのは理解できます。よって、Q4の「積極的取り組み」がなければ授業についてこれないわけで、その結果としてQ5「資質・能力の向上」があるのは当然のことと考えられます。

苦勞して授業をこなしながらも、Q6「授業の満足度」が平均より高いということは、普段の授業の積み上げに加えて、最終発表を前にしてグループでの準備を通した達成感や充実感を感じていたのではないかと考えられます。

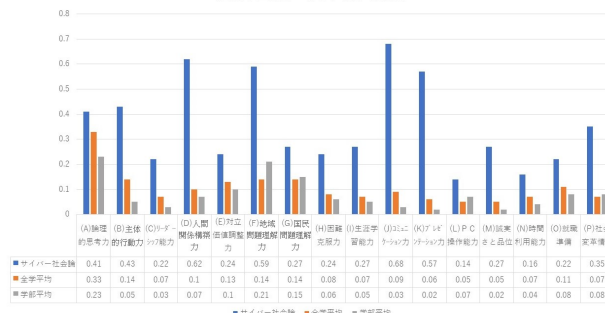
サイバー社会論では、LUNA(学内LMS)を利用することなく、Zoomによるリアルタイムオンライン授業以外に、地域SNS「ひよこむ」に設置したコミュニティに文献・動画・資料を登録して、リフレクションの提出も行いました。本来であれば初めて使う地域SNSに戸惑うと思われましたが、Q.11「コンテ

ンツへのアクセス」では、全学・学部の平均と比較して技術的なハードルは低かったという結果になりました。

8. 2 学生自身の学びに関する評価結果

学生自身が授業を通してどのようなことを学ぶことができたかについて、複数回答で求めているのがQ8でした。この設問全体が、大学教育に求められる学生の価値創造に関する学びの自己評価となっています。結果として、すべての項目で肯定的な回答が全学・学部平均を大きく上回り、一部は顕著な優位性が確認できました。

(図2)学生自身の学びに関する調査



(A)論理的思考、(B)主体的行動、(C)リーダーシップ、(E)調整能力、(H)困難克服能力、(J)コミュニケーション力、(K)プレゼンテーション力、(N)時間調整力については、授業内外で行う「論文学習」、アクティブラーニングで議論しあう「グループディスカッション」、全員がすべての役割を経験する「グループ発表」、自らの学びを振り返る「リフレクション」、チーム一体になって仕上げた「最終発表」を通して習得できた能力だと考えられます。

加えてサイバー社会論では、「信頼」「つながり」など社会性の高いキーワードを、講義全体を通したコンセプトとして考察や議論を行ったことが、(D)人間関係力、(F)地域課題力、(G)国家課題力、(J)生涯学習力、(M)誠実さと品位、が全学・学部平均を遙かに上回る評価の要因となっています。

特に、キャンパスライフを通して大学生として習得して欲しい、(N)時間活用能力、(O)卒業準備、(P)社会変革力については、サイバー社会論では直接的な指導を行っているわけはありません。しかし、全学・学部平均ともに遙かにそれを凌ぐ高い評価を示しています。

これは、学生たちに大きなインパクトを持って伝わっていることを表しており、授業の総合的な成果として大いに注目しておきたいところです。

9. さいごに一価値創造の場としてのオンライン授業

昨年までのサイバー社会論では、「学生の考える力」を伸張させるべく、ひとりの教員と数名のサポーターの体制で対面授業を実施してきました。「考える」ためには、様々な情報を収集し、それぞれの情報を適切に分析し、それを組み上げていかななくてはなりません。

これを実現するには、十分にしっかりとコミュニケーション

ンを行うことが必要ですが、対面授業においても、少数のサポーターが多数のグループを抱えて実現できることには限界がありました。

コロナ禍の中で今年、全国各地からオンラインで支援してくれた多くの社会人メンターの方々(表 1)によって、学生たちをサポートする質が向上するとともに密度が大幅に増加したことが、成功へのもっとも大きな要因でした。

社会人メンターたちは、情報を提示するのではなく、豊富な経験による「情報の見方」を学生たちに提供してくれました。知識を移転するのではなく、学生たちに知的刺激を与えつつ、反対に学生からもさまざまなことを学ぶ「共育」の場となっていたのです。

また、教員による緻密で網羅的なリアクションや、社会人メンターによる授業外のサポートなどによって、オンライン授業で不足する学生とのコミュニケーションを補い、その結果、「学生自身の学びに関する評価結果(8.2)」にあるように、大学生としての貴重な学びを得られました。

完全オンラインによるサイバー社会論の授業が、学生を主役にしながら教員と社会人メンターがサポートしつつ、テーマに沿った共創を行う時間と空間になっていたのです。今回のサイバー社会論のように、空間を越えて多くの優れたメンターを動員できるオンライン授業は、学びの効果を増幅させる「価値創造の場」そのものだと言えるでしょう。

ただ、学生にとって、大学のキャンパスで友人や先輩とともに過ごす時間や、授業外で社会とふれ合う体験が大切であるとは言ってもありません。そしてまた、オンライン授業によって学びのクオリティを向上させる可能性があることを、サイバー社会論が示してくれました。

今後は、コロナ以前の対面授業のみに戻すのではなく、オンラインと対面を組み合わせた新たな授業スタイルの構築を目指すことが必要となると考えられます。

ついでに、大学側は学生が快適で自由にオンライン授業が受講できる環境をキャンパス内に整備し、教員はメンターとして支援してくれる外部人材と連携、対面とオンラインによる授業が適切なタイミングで実施できるようシラバスを検討することで、学生に過度な負担をかけることなく、スムーズに価値創造教育への移行を行うことができるのです。

コロナ禍によって、「開かれた大学づくり^{xix}」を実践する絶好のチャンスが訪れているのかも知れません。

サイバー社会論の授業に献身的に協力して下さった社会人メンターの方々、手間のかかる授業に最後までついてきてくれた学生諸君に、心より感謝致します。

する(Think globally, act locally)」という考え方

iii 学習者である生徒が受動的になってしまう授業を行うのではなく、能動的に学ぶことができるような授業を行う学習方法

iv 講義を録画したビデオ教材

v 2006年から運用されている兵庫県エリアの地域 SNS。

<https://hyocom.jp/>

vi LMS(Learning Management System)は学習管理システムとも呼ばれ、インターネットやパソコン/スマートフォンで学習を行う e ラーニングを実施する際のベースとなるシステム。

vii 本論は、WEB 会議システム「Zoom」を、オンライン授業のツールとして利用することを、ことさらに推奨するものではありません。

viii 仕事上(または人生)の指導者、助言者の意味。メンター制度とは、企業において、新入社員などの精神的なサポートをするために、専任者をもうける制度のことで、日本における OJT 制度が元になっている。

ix 親・教師・学校など教育権を持つ主体だけでなく、多様な立場や領域の人や組織が連携して教育を担うこと、あるいは教育・養育・指導を行う側と受ける側がともに学び成長すること、などを意味する造語。

x 車座トークパート 1

<https://www.youtube.com/watch?v=Tps9B2wKqRw>

xi 車座トークパート 2

<https://www.youtube.com/watch?v=KH1f1HT21Ps>

xii 竹村英樹他「無尽と健康寿命」2006『地域をはぐくむネットワーク』昭和堂 pp.53-54 (ほどよい「閉鎖性」)

xiii OpenSocialNetworkPlatform <https://asp.opensnp.jp/>

xiv <https://xtech.nikkei.com/it/article/NEWS/20080929/315596/>

xv 「学修活動と授業に関する調査」によると、授業を自宅で受講することについて「集中力をもって学習に取り組める」と回答した学生の比率は、サイバー0.59/全学 0.38/学部 0.35 と、この授業には集中力が必要であったことを表しています

xvi 発表内容を概要として A4 で 3 枚程度にまとめたドキュメント

xvii 非常に熱心に取り組む留学生とそれに影響を受けたグループ内外の学生が作用し合って全体の学習効果を向上させていたのが、大きな要因のひとつだと考えられる

xviii 1 人 1 台の学習者用 PC やクラウド活用を前提とした高速ネットワーク環境を 5 年間で整備する計画

xix 大学(短期大学を含む)は、地域や社会の知の拠点として、住民の生涯学習や多種多様な主体の活動を支えると同時に、地域や社会の課題を共に解決し、その活性化や新たな価値の創造への積極的な貢献が求められています。また、こうした取組を継続して行うことで、大学が地域等に支えられる機関として確固たる地位を築くことにつながっていくと考えられます。(文部科学省.2012 年 2 月)

ⁱ 高い専門性と俯瞰的知識を身につけた、より実践的でハイブリットな人材の育成する教育(文部科学省,2010 年 7 月)

ⁱⁱ Glocal とは、グローバル(Global: 地球規模の、世界規模の)とローカル(Local: 地方の、地域的な)を掛け合わせた造語で、「地球規模の視野で考え、地域視点で行動